

# 連体語の構成要素に関する諸問題

李寛子

体言と用言は、自用語的な自立語を、大別にする分類で、この二者には文法上の大きな距りがある。

一般に名詞は体言といわれ、主に事物をさし示し、活用しないことが文法上の特色であるとされているが、それ以外のことばでも名詞であるものがたくさんあることに注意しなければならない。

名詞は主語となり、連体修飾文をうけて名詞句をつくる特色がある。大部分の場合は、助詞をともなつて、文節を構成する。この助詞如何によつて名詞の種類が異なることは言うまでもないことである。

しかし、一般の文法書では、名詞と助詞とを別別に扱っているが、これは文法の説明上やむをえない方法である。一般的に連体修飾構造は、句の後にくる名詞を修飾して名詞句をつくるものであるが、それではどんな句でも名詞に先行して連体修飾ができるかと言え、そうではない。言いかえれば、どのような体言（名詞）が、どのような用言と、どのような関係で語句を構成するかという観点から言えば、体言をこまかく区別することも必要になつてくる。

本文はここに焦点を絞つて、連体語の構造体の究明をモットーとして、述べてみたいと思う。

## 第一章 名詞分類に関する諸学説

山田孝雄氏は「国語の名詞には種類を分つべき文法上の必要なきなり」（日本文法学概論P一〇七）とあるが、わたしには此か異論がある。外観上一般的名詞にも、実は往往にして誤解を招く場合が多多ある。たとえば「自由」は名詞でもある

が、形容動詞としての活用をも備えているので、名詞でもあり 形容動詞でもあるといえる。

各品詞の分類法は個々の考え方によつて異なる。次は諸学者の名詞に関する分類法である。

松下大三郎「改選標準日本文法」 昭和三年四月

詞の運用は詞の本性によつて違い、詞の本性は 詞の種類によつて違ふのであるから、詞の本性論は 詞の種類によつて論じなければならないとして 詞を

①本名詞 ②形式名詞 ③代名詞 ④未定名詞 に大別した。

時枝誠記 日本語の文法 昭和四十二年十月

詞が他の語との接続関係に於いて、その語形式を変えないものを体言と言ひ、その語形式を変えるものを用言と言ふ。したがつて いわゆる名詞 代名詞は言うまでもなく、副詞 連体詞も語形変化がないから体言である。このように時枝文法における体言はきわめて広い範囲を包括するのであるが、以上の代名詞 副詞 連体詞を除いたものが、より狭い意味での体言であり、時枝文法では 名詞はその中に含まれている。時枝誠記は偉大な総論学者で、本領は総論ないし原論にあつて 各論にはなかつた。要するに品詞分類は時枝氏の本領ではなかつた。

大久保忠利 新日本文法入門 一九七七年

①普通名詞 具体名詞  
抽象名詞 ②固有名詞 ③数詞 ④代名詞 ⑤形式名詞

芳賀綏 現代日本語の文法 昭和五十三年五月

①普通名詞 ②固有名詞 ③数詞 ④臨時名詞 ⑤時の名詞 ⑥形式名詞 ⑦代名詞  
渡辺正数 教師のための口語文法

①普通名詞 ②固有名詞 ③形式名詞 ④代名詞 ⑤数詞 ⑥複合名詞 ⑦転成名詞

派生語  
動作名詞

蔡茂豊 現代日語文的詞法 中華民國六十八年

① 普通名詞 ② 固有名詞 ③ 代名詞 ④ 數詞 ⑤ 複合名詞 ⑥ 形式名詞 ⑦ 接了接頭語的名詞 ⑧ 接了接尾語的名詞  
曹欽源 日語綜合読本 中華民國七十三年六月

① 通常名詞 ② 形容名詞 ③ 動性名詞

以上の諸學說を比較してみても分るるように、それぞれに考え方が異っている。どのような名詞が、どのような用言と、どのように連體語（連體修飾構造）を形成するかにあたって、わたしはもつと細かく名詞を分類する必要があると考え、下記の如く十一種類に分類して、例を加えた。

① 普通名詞（具体名詞、抽象名詞） ② 固有名詞（單純名詞、複合名詞） ③ 數詞 ④ 形式名詞 ⑤ 代名詞 ⑥ 轉成名詞  
⑦ 複合名詞 ⑧ 派生語 ⑨ 動作名詞 ⑩ 時の名詞 ⑪ 不定詞（疑問詞）

## 第二章 私の名詞分類についての考え方

### 一、名詞を意義から大きく分類すると

(一) 普通名詞―普通の事物の名を表わすものをいう。

1. 具体名詞―山、星、本、机、鉛筆、など。

2. 抽象名詞―學問、楽しさ、芸術、人生など。

厚さ、大きさ（大野晉著、日本語の文法を考ふるP五九）

(二) 固有名詞―地名、国名、人名、書名、学校名など、特定のものを示す名をいう。名詞の中で固有名詞は特に止めどもなく増えて行く。人が生まれ、団体ができ、新しい商品が作られ、学校が増設され……するたびに、それぞれ名まえがつけられて行くから、そうした固有名詞の繁殖を勘定に入れると、名詞に属する語の数は、はつき

りと数えることはできない。たとえば、

1. 単純名詞—中央大学、佐藤栄作、アメリカ、中華民国、桃太郎、夏目漱石、日本、NHKなど。
2. 複合名詞—中曽根首相、中山委員、国際ペンクラブなど。

(注) 「太陽、月」は一つしかないものであるが、普通名詞としてあつかう。

(三) 数詞—数、数量、順序などを表わすものをいう。

一、二、十、百、千、万、四つ、六つ、五本、八個、第一、三番、第二章

(注) いくつ、いくら、何回、何番目など疑問を表わすものも含む。

(四) 形式名詞—名詞としての実質を失つて、形式的に名詞の働きをするものを言う。

このもの、このとき、このこと、このため、このわけ、このはず、このまま、このとおり。

(五) 代名詞—人、事物、方向、場所などの名をいわず 直接に指し示して言うことば。人を指して言うものを人称代名詞、

事物 方向 場所を指すものを指示代名詞と言う。

(注) 「自称」は話し手が自分や自分側のものを指す場合、「対称」は話し手が聞き手や聞き手側のものを指す場合、

「他称」は話し手が自分や聞き手以外のものを指す場合、「近称」は話し手が自分に近いものを指す場合、

「中称」は話し手が聞き手に近いものを指す場合、「遠称」は話し手が自分からも聞き手からも遠いものを指す場合、「不定称」は話し手が自分に分らない場合、指すものがさまらない場合に用いる。つぎは代名詞を整理して表にしてみた。

理して表にしてみた。

指示代名詞			人称代名詞							
方向に関するもの	場所に関するもの	事物に関するもの	わたし	わたし	わたし	わたし	わたし	わたし	自稱	
			わたくし	わたくし	わたくし	わたくし	わたくし	わたくし	わたくし	
こち	こち	こち	こち	こち	こち	こち	こち	こち	近稱	他稱
こち	こち	こち	こち	こち	こち	こち	こち	中稱		
あち	あち	あち	あち	あち	あち	あち	あち	遠稱		
どち	どち	どち	どち	どち	どち	どち	どち	不定稱		
これ	これ	これ	これ	これ	これ	これ	これ	これ		
これら	これら	これら	これら	これら	これら	これら	これら	これら		
ここ	ここ	ここ	ここ	ここ	ここ	ここ	ここ	ここ		
そこ	そこ	そこ	そこ	そこ	そこ	そこ	そこ	そこ		
あそこ	あそこ	あそこ	あそこ	あそこ	あそこ	あそこ	あそこ	あそこ		
どこ	どこ	どこ	どこ	どこ	どこ	どこ	どこ	どこ		
な	な	な	な	な	な	な	な	な		
どれ	どれ	どれ	どれ	どれ	どれ	どれ	どれ	どれ		
だれ	だれ	だれ	だれ	だれ	だれ	だれ	だれ	だれ		

(内) 転成名詞—ほかの品詞から転じた名詞

1. 動詞から転じた名詞

集まる↓集り、光る↓光り、始める↓始め、考える↓考え、釣る↓釣り、話す↓話し

2. 形容詞から転じた名詞

寒い↓寒さ、大きい↓大きさ、悲しい↓悲しみ、親しい↓親しみ

3. 形容動詞から転じた名詞

まじめだ↓まじめさ にぎやかだ↓にぎやかさ すなおだ↓すなおさ 優雅だ↓優雅さ

(七) 複合名詞—二つ以上の単語が合してできた名詞で、それ全体を一つの名詞としてあつかう。複合名詞にはいろいろな

合成のしかたがある。

1. 「名詞+名詞」—朝日、昼飯、雨傘、山道。

2. 「動詞+名詞」—離れ島、別れ道、飛び道具。

3. 「名詞+動詞から転じた名詞」—稲刈り、ひげ剃り、みかん狩り、砂遊び。

4. 「形容詞+名詞」—うれし涙、長靴、細道、甘党。

5. 「動詞+動詞から転じた名詞」—組み立て、走り書き。

6. 「形容詞+動詞から転じた名詞」—高跳び、うれし泣き。

7. 「名詞+助詞+名詞」—茶の湯、茶の間、火の子、火の車、楽の音、虫の音、玉の輿、奥の手。

8. 「名詞+形容詞」—足早、気軽。

9. 「形容詞+形容詞」—遠浅、薄赤。

10. 「同じ名詞の重複」—人人、月月、日日、我我。

11 「副詞十名詞」ただもの

12 「漢字十漢字」商人、図書館 班長、懐中時計。

(八) 派生語—接頭語や接尾語がついて名詞となったもの。

1. 接頭語がついたもの—お茶、お菓子、ご飯、ご心配、おみ足、おみ興。

2. 接尾語がついたもの—正しき、深さ、美しき、眠け、寒け、甘み、大山君。

(九) 動作名詞—散歩、勉強、旅行、調査、出張。

(十) 時の名詞 今日、夏、さつき、夕方、午前、午後。

(十一) 不定詞—何、誰、某、いずれ、幾つ どこ、どれ どっち、どちら。

二、名詞の数

固有名詞の繁殖で 名詞の数がつきつきと増加してはつきりと数えることはできない。しかしおよそどのぐらいあるのだろうか。国立国語研究所の調査によると つぎのとおりである。

1. 和語 (やまとことば) 一一、一三四語 三六・七%

2. 漢字語 (漢字のことば) 一四、四〇七語 四七・五%

3. 外来語 (カタカナで表現) 二、九六四語 九・八%

4. その他 (和語と外来語の複合語、たとえばスポーツ選手) 一、八二六語 六・〇%

三、名詞と代名詞の違い

1. 普通の名詞は そのものを示すことばは一つしかないのに、代名詞の場合には そのものの位置によって 同じものが、近称、中称、遠称、すなわち 「これ」「それ」「あれ」などと、いくつかの言い方で示される。

2. 同一人物でも 自分なら「わたくし」相手ならば「あなた」第三者ならば「あのかた」となり、知らない人からは「あなた」といわれるように 指し手の立場によって、いろいろな言い方で表わされる。
3. 同一人物が 指し手の意識によって、「あなた」「おまえ」「きみ」「きさま」などのように いろいろな言い方で表わされる。

### 第三章 連体語の構成について

修体文素は かならず名詞を修飾する。形は ①動詞、形容詞、形容動詞の連体形 ②連体詞 ③接続詞 ④副詞 ⑤感動詞 ⑥名詞十の十名詞 ⑦単位文で、その述文素の用言が連体形になっているものなどがある。これらの形のもとに形成される連体修飾語には それに続く名詞の種類が重視されることになる。連体修飾構造とは文が名詞を修飾するものと簡単に言われているが、その修飾する文と被修飾名詞との間には、明らかに一定の関係があつて、どの名詞でも修飾できるというものではない。たとえば、「人を表わす名詞」「動物を表わす名詞」「場所を表わす名詞」「物を表わす名詞」「時を表わす名詞」などを区別することも必要になる。

わたしの考え方によって 分類した十一種類の名詞は、果してみなそれぞれ被修飾名詞になり得るのだろうか。上段に記してある各品詞によって下段の十一種類の名詞を修飾して見た結果は次のとおりである。(例は省略)

動詞	1	2	3	4	5 (人称)	6	7	8	9	10	1. 普通名詞
形容詞	1	2	3	4	5 (人称)	6	7	8	9	10	2. 固有名詞
形容動詞	1	2	3	4	5 (人称)	6	7	8	9	10	3. 数詞
連体詞	1	2	3	4	5 (人称)	6	7	8	9	10	4. 形式名詞
											5. 代名詞
											6. 転成名詞



接続詞	1	2	3	5	6	7	8	9	10
感動詞	1	2	3	5	6	7	8	9	10
名詞十の十名詞	1	2	3	5	6	7	8	9	10
副詞	1	2	3	5	6	7	8	9	10

- 7. 複合名詞
- 8. 派生語
- 9. 動作名詞
- 10. 時の名詞
- 11. 不定詞(疑問詞)

先ずこの結果を見るとどの項も11不定詞(疑問詞)が被修飾名詞としてなりたないことが分る。

不定詞(疑問詞)は名詞であるはずなのに被修飾名詞になることができない。たとえば

「あなたは 何を食べるか。」は

「あなたは 食べるか何」とは言わない。

「何」「誰」「いつ」「どこ」「どれ」などの類は名詞であることに違いない。「が」をつけて主格語にはなるけれども

「は」をつけて提示語になることは不可能である。たとえば 何がほしいですか。誰が行きますか。いつが適当ですか。

どこが痛いですか。どれがいいですか。の「が」助詞を「は」に置きかえることはできないのである。

すなわち不定詞を除いたほかの「は」のつく名詞が連体語を構成する要素のあることを発見した。

不定詞(疑問詞)が被修飾名詞になり得ないのは、それが名詞でないからではなくて、それを修飾する文が被述文ではなく、文末詞を含む疑問文だからなのである。

又4の形式名詞も「接続詞、感動詞、名詞十の十名詞、副詞」の被修飾名詞としてなりたない。

五冊、八本、十人などの数量表現は本来は名詞であると考える。(数だけを表わす部分を本数詞と言ひ その下に続く語を助数詞と言ふ。本数詞と助数詞を合せて数詞と言ふ。)しかし次の例のように

「わたしは鉛筆を三本買った。」はどうしても

「わたしは鉛筆を買った三本。」とは言わない。

従つてこの例で表わす限りでは、副詞とすべきであるようにも見える。数詞の特質としては、常に連用修飾語になり得る点が、他の名詞と違っている。

連体修飾構造のもう一つの性格は、被修飾名詞と連体修飾文中の名詞が同一でなければならないことが要求される。敘述文中にある任意の名詞をとり出して、それを敘述文末に転位せしめ、それが有意味かつ文法的に機能し得るかによつて被修飾名詞か否かを分別することができるのである。

たとえば、次の文中にある「わたし」「昨日」「西門町」「映画」の四名詞は、いずれも次のように文末に来て、被修飾名詞となり、名詞句を形成することができる。

1. わたしが昨日西門町で見た映画
2. わたしが昨日映画を見た西門町
3. わたしが西門町で映画を見た昨日
4. 昨日西門町で映画を見たわたし

つまり主語と言わず、目的語と言わず、時の名詞、所の名詞その他すべての名詞について連体修飾が可能であることが分る。すなわち連体修飾構造に関する限り、名詞はそれがいかなる格をとろうとも、文中においては平等に並べられているものと解して差し支えない。

## 第四章 各品詞の連体修飾

### 一、形容動詞十名詞の種類

#### 1. やまとことば

にぎやかな町、暖かな日射、静かな田舎。

2. 漢語系

親切な人、陰気な性質。

消極的な人、個人的な面。

3. 漢字一字

楽な姿勢、変な恰好、妙な気分、急な用事。

4. 外来語系

スマートな人、スポーティなデザイン。

5. 語幹が形容詞と同じ形容動詞

あたたかい日射

あたたかな日射

やわらかい餅

やわらかな餅

こまかい粉

こまかな粉

まっしろい雪

まっしろな雪

6. 語幹が名詞にも使われる形容動詞

平和のために努力する

平和な国家

幸福を求める

幸福な生活

7. 接頭語のついた形容動詞

こぎれいな店、ご立派な心構え、おみごとな技術、

接尾語のついた形容動詞

科学的な建築、さびしげな表情。

8. 特別の形容動詞（なが落ちる）

同じ色、こんな本、そんな形、あんなスタイル、どんな先生、

9. 連体詞とも称されている形容動詞

大きな船、おかしな話、小さな口、ろくな収入、

めつたな間違い、たいがいな傾向、たいそうな立腹、いろんな種類、

10 タルト型形容動詞

堂堂とした体格 連綿と続く訓話。

堂堂たる演説 連綿たる家系

形容動詞十名詞の活用表

現在肯定	静かな所
過去肯定	静かだった所
現在否定	静かでない所
過去否定	静かでなかった所

二、動詞十名詞の活用表

									肯定 否定 活用形
過去持續否定	過去持續肯定	現在持續否定	現在持續肯定	過去否定	現在否定	過去肯定	現在肯定	造語形	基本形
言っていなかった人	言っていた人	言っていない人	言っている人	言わなかった人	言わない人	言った人	言う人	言い方	
見せていなかった時	見せていた時	見せていない時	見せている時	見せなかった時	見せない時	見せた時	見せる時	見せ物 見せ時	使役の形
言われていなかった人	言われていた人	言われていない人	言われている人	言われなかった人	言われない人	言われた人	言われる人		受身の形
(言わせられていなかった人) (言わされていなかった人)	(言わせられていた人) (言わされていた人)	(言わせられていない人) (言わされていない人)	(言わせられている人) (言わされている人)	(言わせられなかった人) (言わされなかった人)	(言わされない人) (言わされぬ人)	(言わせられた人) (言わされた人)	(言わせられる人) (言わされる人)		使役受身の形
書けていなかった人	書けていた人	書けていない人	書けている人	書けなかった人	書けない人	書けた人	書ける人		可能の形

## 三、形容詞十名詞の活用表

造 語 形	現 在 肯 定	過 去 肯 定	現 在 否 定	過 去 否 定
美しき肢体、麗しき鳥、長着、短か袖、深酒	面白い小説	面白かった小説	面白くない小説	面白くなかった小説

## 四、連体詞十名詞

1. 「る」で終わる連体詞  
 ある時 　いかなる時 　いわゆる偉人 　きたる十日 　あらゆる本
2. 「の」「が」で終わる連体詞  
 この花 　その本 　あの山 　ほんの少し 　わが社
3. 「な」で終わる連体詞  
 大きな音 　小さな靴 　おかしな人
4. 「た」「だ」で終わる連体詞  
 たいした評判 　たった白円 　とんだ災難

## 五、接続詞十名詞

## 1. 並列

東京および札幌は大都市だ。

山また山を越えて行く。

書道ならびに茶道を習う。

## 2. 選択

肉が好きかそれとも魚が好きか。

生花あるいは音楽を習う。

明日もしくはあさつて会おう。

## 3. 添加

風が強く、それに雨も酷い。

今日は休みだし、おまけに上天気だ。

かの女は気品があり、その上頭もよい。

## 4. 順接

日が暮れた。そこで帰途についた。

花が散り、そうして梅の突がなる。

昨日は雨だった。それでどこへも出かけなかった。

## 5. 逆接

熱は下った。だが安心できない。

今日は日曜日だ。けれど宿題が沢山ある。  
あなたにも一理ある。しかし承知できない。

六、感動詞十名詞

感動詞の種類

- 1. 感動
- 2. 呼びかけ
- 3. 応答

1. 感動

いや、失礼。 ははあ、お困りですか。

どうも、お世話様でした。 まあ、蛇が！

あら、どこへ行つたのかしら。

おや、誰かが呼んでいる。 やあ、林君！

2. 呼びかけ

おい、お前。 ねえ、映画に行かない。

さあ、登校、登校。 くら、いたずら しちやいかん。

よう、僕もつれて行ってよ。 そら、私の言ったとおりでしょ。

3. 応答

いいえ、舶来品ではない。 はあ、承知しました。

いや、僕じゃない。 ええ、(はい) 国産品です。

そり、君も行くか。 なあに、子供のいたずらさ。

七、助詞十名詞 なりたたない



八、助動詞十名詞 なりたたない

九、單位文で、その述文彙の用言が連體形になっているもの

1. わたしの行っている学校。

2. 市場で買った大きな花。

3. あなたの好きな花。

十、名詞十の名詞

1. 台北の町 2. 父の日

3. アメリカの首都 4. 日本語の字引

十一、副詞十名詞

1. 断定の呼応—明日はきつと雨だ。

2. 打消の呼応—けつして迷惑はかけない。

3. 禁止の呼応—断じて出国は許さない。

4. 疑問の呼応—なぜ昨日行かなかったのか。

5. 反語の呼応—どうして彼にできるものか。

6. 推量の呼応—たぶん出国できるでしょう。

7. 希望の呼応—ぜひ私も見たい。

8. 仮定の呼応—万一雨でも決行する。

9. 比況の呼応—まるで絵のような景色だ。

## 第五章 名詞と形容動詞のかかりあい

形容動詞の語幹は、しばしば名詞と紛れる、学者によつては、この品詞を認めない方もいる。日本語では形容詞があまり豊かでなかつたので、その不足を補うために形容動詞という意味上形容詞とかなり似ている品詞を加えた。

時枝誠記氏は形容動詞を認めず、すべて「体言十指定の助動詞」として、理由を次のように述べている。

(1)たとえば「静かだ」「りっぱだ」は常識的な語感から言つても、「静か」と「だ」、「りっぱ」と「だ」に分解されて考えられ辞書においても「しずか」「りっぱ」をもつて、語を検索するようにしている。従つて、これを二語と考えるのが正しい。

(2)二語と考えると、それぞれの語はどういう品詞に属するかといへば「静か」「りっぱ」は事柄を表わす語で詞に属し、「だ」は話し手の判断を表わすもので辞に属する。即ち詞に属する体言に、指定の助動詞「だ」の加わつたものと考えらるべきである。(日本文法口語編別記)

橋本進吉氏は文節という言語単位を設定して、文節について形態面に力点を置いて説明し、形容動詞を品詞として理論づけられた。(国文法系統論P八六)

このように、形容動詞を認めるか否かは、品詞の分類そのものに伴う問題が出てくる。品詞の分類は、ほとんどの場合、典型詞な単語について行うのが普通で、実際に分類してみると、必ずしも截然と分類できないものがある。ある品詞とある品詞との中間に位置する語や、限定された用法だけを持つ語や、二つ三つの品詞にまたがるような性質を持つ語もある。そこで、名詞の特徴の主なものをまとめると、

①格助詞「が」がついて主格語になる。

②「だ」をともなつて述語になる。

- ③ 格助詞「を、に、で、から、より」などがついて補語になる。
  - ④ 連体助詞「の」がついて連体修飾語になる。
  - ⑤ 連体修飾語を受ける。
  - ⑥ 単独では連用修飾語にならない。
- 形容動詞の特徴は

- ① 単独で述語になって 文が終る。 静かだ、静かだろう、静かだった。
- ② 単独で述語になって 文の途中で 並立的または、仮定的に中止する。 静かで、静かなら。
- ③ 格助詞「より」のついた補語を受ける。 全活用形
- ④ 連体修飾語になる。 静かな
- ⑤ 連用修飾語になる。 静かに
- ⑥ 連用修飾語のうち程度の副詞を受ける。 全活用形
- ⑦ 連体修飾語を受けない場合が多い。 全活用形

以上の名詞と形容動詞の特徴を比べてみると、名詞と形容動詞の語幹には次のような違いがあることが分る。

- ① 名詞には格助詞がつく。
- ② 名詞は連体修飾語を上接させる。
- ③ 名詞は格助詞「の」がついて連体修飾語となる。
- ④ 形容動詞語幹は連体形「……な」の形で連体修飾語となる。
- ⑤ 形容動詞語幹は接尾辞「さ」をつけて名詞となる。
- ⑥ 形容動詞語幹は連用修飾語を上接する。

⑦形容動詞語幹は「に」の形で副詞的修飾語となる。

この点から見ると、「まじめ」は体言としての性質と、形容動詞語幹としての性質を共に持っているといえる。

A、かれは、まじめがとりえだ。

B、かれは、まじめにはたらいっている。

Aは「が」がついているので名詞、Bは副詞的修飾語として機能しているから形容動詞の語幹である。

③の「名詞十の」と④の「形容動詞語幹十な」は、それぞれ連体修飾語となる。

しかし、「な」と「の」の両方ともとれる形容動詞があることに注意すべきである。形容動詞の連体形語尾に「な」のほか、それを名詞として「の」を認めれば問題がないのであるが、「の」はどの形容動詞の語幹にもつくというわけにはいかない。

たとえば「自由の女神」と「自由な女神」は 早稲田大学の森田良行教授の考えでは 内容的には差がない。扱う品詞の分解はその人によつて違い 「の」「な」の両方とも使えるから使うのであつて、目前まだその学説が定ついていないことだ。(一九八四年七月十三日 日本語教育自由討論)

フランスの「自由の女神」もアメリカの「自由の女神」も森田説に従えば「自由な女神」と言えることになるが、おそらく「自由な女神」と言う人はいないだろう。

「自由」には強い名詞性があり 一方形容動詞として活用もそろっているので 形容動詞でもあり 名詞でもあるわけだ。どちらが主になるかは使用例を統計的に調べなければならぬ。だから「自由」は「形容動詞性をもつ名詞」ということになる。それで「自由の女神」は「自由の象徴としての女神」で物的な面を表わしている。すなわち一つの物体として目に写る。

「自由な女神」の「自由な」は形容動詞の連体形で述語性がある。たとえば「国民の信仰の自由な女神」というような文脈になり状態を表わしている。

それで わたしは状態をより物的に表わすのに「の」を使い、状態をより状態に表わすのに「な」を使うのだと考える。しかし「の」「な」の両方がとれて 共に状態をより状態に表わすことのできる形容動詞があるが 数少ない。

たとえば

当然	の	平凡	の	自然	の
な	なりゆき	な	生活	な	傾向

「当然、平凡、自然」が状態を表わす形容動詞なら、修飾される「なりゆき、生活、傾向」も状態を表わす名詞である。それ故「の」「な」の両方がとれて 共に状態をより状態に表わすことができるのである。

「当然」は語幹だけで副詞的に使われる。

大学生なら当然分るはずだが…… のように。

又わずかの 金の ように量でいくものは名詞(数詞)に入るから「の」が入る。

そっくりの 話し方 の ように擬態語に属するものにも「の」が入る。

形容動詞には、やまとことば系の「にぎやかな」「あわれな」、漢語系の「完全な」「自然な」と、「的」を用いる「消極的な」「具体的な」、漢字一字の「楽な」「妙な」、外来語系の「スポーティな」「タフな」などがあるが、すべて同じ活用をする。

ここで 中国人学習者にとって誤用しやすい問題が存在する。中国語では形容詞と形容動詞の区別がなく すべて形容詞になっている。中国語の形容詞、動詞の連体形には ふつう「的」を用いる。しかし 日本語では連体形自体に中国語の「的」にあたる機能が含まれているので 「的」の類推でそれにあたる「の」を使う必要がないのであるが、往往にして「の」

を使つてしまふ傾向がある。又形容動詞語幹の多くが漢語であるので、中国人学習者に中国語の意味、用法で類推する便宜をあたえるからここでも「の」を使うのである。

形容動詞の連体形には「な」を使えばいいと言えるが、それには「な」型と「的な」型、たとえば「健康な」「きれいな」と「消極的な」「具体的な」その他いろいろある。「健康な」「きれいな」は中国語で「健康的」「漂亮的」である。けれども「消極的な」「具体的な」の「的な」型は、中国語で「消極性的」「具体性的」となり、「性」がついてそのありさま、ようすを示すのである。

## あとがき

以上いろいろと連体語の構造体に関する私見を述べてきた。要するに私の考え方によつて分類した十一種類の名詞に「が」をつけてみると、みな語句として成立する。しかし「は」をつけてみると、不定詞は語句として成り立たないので、不定詞は連体語を構成する要素を有しないことが明らかである。

故に名詞と言うのは一つの名詞であり、連体語と言うのは一句の名詞であると言えるのである。